

# 『朝の花火』

室市雅則

3,434 文字

就職活動を目前に控えた男。

履歴書に記入できることがなく、埋めるための要素として「ボランティア」を勧められるが腰が重い。

気晴らしに花火大会に行ったのだが、酔って寝てしまい海岸で朝を迎える。

『ボランティア』でもすれば？

履歴書が白い僕が学校の先輩からもらった言葉。

大学三年生となって、就職センターによる講座が行われ始めた。まだまだ先の話と気楽に構えていたのだが、もう企業訪問のようなことを初めている人もいるらしい。

『履歴書はこう書け！』と受け取ったサンプルを見て固まってしまった。

びっしりと文字で埋められていて黒い。そして、『学生時代に頑張ったこと』とある。

ここまで黒く埋めるものは持っておらず、僕は何も頑張っていない。

部活やサークルには実家からの通学が二時間もかかるので所属していないし、バイトだってたまに登録制の日雇いで看板持ちをしたり、道端でティッシュを配るだけだ。思えば、どちらも街頭に立って、雨が降ろうが雪が舞おうが行い続けているので、『頑張っているな』とは思うけど、求められているのはそれでないことは分かっている。

ならば、学生の本分である学業を頑張っていれば胸を張れるはずだが、これも単位を取るだけのような態度なので、学費を出してくれている両親には申し訳ないが、何かを得ている実感もない。

でっちあげようにも素材がない。だから、僕の履歴書は白い。

その中、同じゼミで全国規模の重機販売会社から内定を得た先輩がアドバイスとして、『ボランティア』でもしてみれば？』と言われた。

ただすれば良いというものではなく、そこで何を不得、何を見て、何を感じたのか、そして、それを希望する会社へのアピールに繋げることが大切だとも教わった。

少し話が逸れるが『ボランティア』には懐疑的な所がある。

つまり、僕のように下心で取り組むようなことが多くあり、それは『ボランティア』の本質からずれているのではという所だ。

偽善だとか言いたいのではなくて、乗り切れない部分があるというだけ。

どうしようと悩んでいるうちに夏が来た。

相変わらず僕の尻は重たいままで、履歴書が黒くなる気配はなかった。

それでも遊ぶとなるとフットワークは軽い。今日は、地元の友人から打ち上げ花火に誘われ、シートを敷いた砂浜で、缶ビールを楽しんでいる。缶ビールは飲み物売りのバイトをしている友人からきちんと高い定価で買った。

こういった時には不思議と値段の割に大して美味くもない露店の焼きそばや焼き鳥が絶品に生まれ変わる。だから、ビールのペースも早くなる。

そして、花火が打ち上がる頃には、僕の気分もかなり良くなって、最高に楽しめた。

海岸に集まった何千の人たちが同時に空を見上げている。

花火が打ち上がるたびに歓声が上がる。

こんな風に人を感動させるなんてすごいなと思う。

世界でも絶賛されているらしいし、日本が誇る文化だ。

花火師にでもなろうかしらなんて思うが、そんなに甘くはないだろう。

目の前で繰り広げられる一瞬の華と現実的な悩みがごちゃ混ぜになり、さらにビールを  
放り込んでしまう。

一体何発の花火が上がったのか分からないが、観客から大きな拍手が巻き起こって終  
演をした。

皆が一斉に出るのは安全面に問題があるらしく、退場規制がかかっている。

そのため、歩いて帰ることができる僕は落ち着くまで、ここで飲むことにした。

友人がおまけということで差し入れてくれたおかげで、ビールだけはたくさんあった。

そして、調子に乗ってさらに飲んだ。

眩しくて目を覚ましたら、朝だった。

波の音と潮風。場合が場合であれば清々しいが、二日酔いでスッキリしない。

汗が浮かんだ顔面には砂が張り付いている。

僕の鼻には割り箸が差し込まれている。

薄情にも友人たちは僕を残して帰ったようだ。

鼻から割り箸を抜き、放り投げる。

立ち上がり、顔の砂を払って、伸びをすると大きな欠伸が出た。

「ちょっと！」

大きな声に驚いて中途半端に欠伸が止まった。

そちらを振り向くと僕と同じ年くらいの帽子を被って首にタオルを巻いた女性が軍手を  
した指先で僕を指差している。

女性が僕のすぐそばまでやってきた。

汗がうっすら浮かんでいる。ほとんどメイクをしていないが、正直、可愛い。タイプだ。

そんな子が僕に何の用だろう。

「拾って、ちゃんと自分で始末して下さい」

先ほどの割り箸を指差した。

ガックシ。

「すみません」

僕は割り箸を拾って、ハーフパンツのポケットにねじ込んだ。

女性は僕を睨んでいる。

「後始末くらいちゃんとして下さい」

浜辺には女性のように帽子を被り、軍手をはめ、ゴミ袋を片手に持った人が数名いた。

周りを見渡すと昨日の名残として、ゴミが散乱している。

かき氷のカップ、紙皿、食べかけ、飲み残し、空きカン…

花火とは対照的に、はっきり言って汚い。

僕もそのゴミに加担した身だが、これでは花火を見に来ているのだから、海岸を汚しに来ているのだから分からない。

「はい、すみません」

僕は頭を下げると彼女は僕に背中を向けて、慣れた手つきでゴミを拾い始めた。

食いちぎられたフランクフルトであろうが、蟻がたかっているアイスの棒だろうが、ひょいひょいと拾う姿が眩しく、輝いている。

彼女は朝の花火だ。

黙々と彼女はゴミを拾い続ける。周りの人も同じように拾っている。

もしやこれは『ボランティア』だろうか。

僕のイメージとは違っていた。

何というか、さささっとやってメンバー集合写真をカシャカシャ撮ってニコニコご満悦みたいのを想像していたのに、こちらはそんな気配が微塵もない。淡々としている。

これなら良いかもしれないし、僕は彼女と仲良くなりたい。

彼女を追いかけて声をかけた。

「すみません。僕もやらせてもらえませんか？」

彼女は砂まみれのベビーカステラをゴミ袋に放り投げた。

「お詫びの代わりですか？」

「いや、そうじゃなくて」

彼女が僕を見た。呆れたような顔も素敵だ。

「人が多いに越したことないから。気を付けて下さいよ。ガラスとかもあるし」

「はい」

彼女がウエストポーチからゴミ袋を数枚取り出し、僕に手渡した。

「基本的には燃えるけど、ビンと缶、ペットボトルは分けて下さい。袋がいっぱいになったら、あっちに集めているから、持って来て下さい」

受け取ったゴミ袋の枚数に、そんなに落ちているわけねーだろと思ったがあっという間に一枚目が満杯になり、僕は合計五枚分のゴミを集めた。

集積所には昨日打ち上がった花火と同じくらいの数とまでは言わないけど、溢れんばかりのゴミが集まっている。

ボランティアメンバーたちはもう汗まみれ、砂まみれで、僕もそうだった。

彼女がやって来て、僕にスポーツドリンクをくれた。その顔には暑さもあって疲れが浮かんでいたが可愛い。

「きっかけは、あれでしたけど、お疲れ様でした」

「ありがとうございます」

一気にスポーツドリンクを飲み干した。全身に水分が行き渡って気持ち良かった。

「いっやあ、一仕事した後の一杯は美味いっすね」

こちらで距離を縮めて、彼女と仲良くなりたいなと思った。

彼女は笑った。

「仕事させているのは、あなたみたいな人だけだね」

「すみません」

僕は次に何と言おうか言葉を探していると、彼女から声がかかった。

「近所ですか？」

「はい。もうすぐそこです」

「知ってます？この辺りの浜にウミガメが来ているって」

「いえ…」

彼女は隣の県でウミガメ保護を目的とした NPO で働いており、この浜の掃除ボランティアは市が募集していたのを知って参加をしたらしい。

ウミガメには綺麗な砂浜が必要であること。しかし、砂浜自体が減って来てしまっており、今ある砂浜を守らなければならないこと。

彼女が教えてくれたことは、全てが初耳だった。でも知らないなりに僕は口を開いた。

「昨日の花火、めちゃくちゃ綺麗でした。皆んな同じものを観たはずなのに、片方では、汚していった勝手なもんですね」

彼女は頭の上で手を組んで、大きく伸びをした。

「仕方がないよ。バカなんだから。私も含めて人間ってさ。だから、せめて気が付いた方がやるのがバランスなんだと思う。誰かが汚したんだから、誰かがそれを片付けないと。大変だけど、それも人間っぽいじゃん？ムカつくけど」

やはり彼女は眩しかった。

僕の『ボランティア』のイメージは覆り、僕は名前も知らない彼女に惚れた。人間として、異性として。

今日でお別れにならないためにも僕は次のステップに進まなければならない。

「僕もやらせて下さい」

しまった。何をやるのだ？ウミガメ保護を？掃除を？

彼女が笑った。

何でも良いや。彼女が喜んでくれるなら。

「そう」

彼女は空を見上げてちょっと考えて、僕に微笑んだ。

「履歴書、書いて来て下さいね。名前も知りませんし」

僕の履歴書はまだ白い。

(了)